

四国防災八十八話における復興に関する教訓の抽出と一考察

徳島大学 学生会員 ○北村大翔 徳島大学 正会員 松重摩耶
 徳島大学 正会員 上月康則 徳島大学 正会員 山中亮一
 徳島大学 学生会員 松家茉莉子 香川大学 正会員 松尾裕治

1. はじめに

東日本大震災から12年を経て復興の課題が指摘されるようになってきた¹⁾。南海トラフ巨大地震に備える地域ではこうした課題や地域の歴史、地震での復興過程を教訓にして事前復興²⁾を考えることが望ましい。そこで本研究では、その一助とすることを目的に、過去の徳島県での地震津波の復興の記録から教訓を見出すことを試みた。

2. 方法

四国各地に残る災害に関する言い伝えや体験談がまとめられた「四国防災八十八話」³⁾の一つでもある、徳島県海陽町穴喰浦を襲った過去4度の地震・津波の様子を記した「震潮記」⁴⁾に着目し、復興に関する事項の抽出を行った。なお、震潮記とは、徳島県海部郡海陽町穴喰の元組頭庄屋・田井久左衛門宣辰(1802~1874年)が、当地での南海地震津波の被害・救援・復興の経過を詳細に記した日記である。震潮記の特徴として、一般の震災体験記録が主として住民個人やその家族・隣人の被災実態の紹介にとどまっていることが多いのに対して、穴喰浦全体の被害と救援および復興の経過に関して詳細に実相を明らかにしている⁵⁾。

3. 結果・考察

「震潮記」から復興に関する事項を12個見つけ出すことができた(表1)。例えば、「被災後の治安悪化や流言による混乱」「食料・生活・就労支援」などは、東日本大震災でも見られたことでもある。特に、①現地再建や高台移転、②現地の資材を用いた仮設住宅建設、③祭事と復興については、事前復興の重要な課題の一つと考え、以下のように考察を加えた。

① 現地再建と高台(高地)移転について

「在所はすべて失くなり」「町家も残らずそれぞれ町並みにして復興される」とあることから、当地域は壊滅的な被害を受けたが、復興は現地再建でなされていたことがわかる。徳島県復興指針では、事前に高台移転に取り組むことが「実践する事前復興」とされており⁶⁾、実際に美波町では、町立病院を統合再編した際に高台に美波病院を開院することや、日和佐こども園や応急仮設住宅の建設候補地となる防災公園の整備計画などが進められている⁶⁾。ただし、1933年昭和三陸地震後に多くの集団移転⁷⁾が行われ、東日本大震災の復興でも高台移転が各地で行われた岩手県、宮城県の沿岸部では、その後の地域社会の変化から高台移転への様々な課題も指摘されている。以上のことから、「徳島市など平野で広域な被害が想定され高台移転が困難な地域においても、事前に復興まちづくり計画を議論しておくこと」という教訓を得ることができた。

② 現地の資材を用いた仮設住宅建設について

永正9年の大津波の際に、「松を切り払うとともに(中略)、山林が所々にあり、この分を残らず切り払い、家の建築材料にした」とあることから、家屋の復旧に必要な資材を地域内で調達していたことがうかがえる。東日本大震災では、資材の調達、施工体制が整わず、応急仮設住宅の供給が大幅に遅れる事態が発生した。その一方で、あらかじめ地域材を活用した木造の応急仮設住宅の開発と供給体制の整備に取り組み、震災後の迅速な応急仮設住宅の供給に貢献した自治体もあった⁸⁾。また鳥取県では「県産材活用木造応急仮設供給マニュアル(H27)」⁹⁾が策定されている。こうした事例から、「南海トラフ巨大地震後の仮設住宅には県産材を活用し、その備えを行う案も計画しておくこと」が教訓の一つになると思われる。

③ 祭事と復興について

震潮記には祇園祭り、愛宕山の祭り、八幡神社の3つの祭りが震災後にも行われことが記されており、「参

詣人も例年より多かった」「神祭りもできた」「お供馬なども多く、殊の外にぎわわしく行われた」などと祭事によって被災者が復興感を感じていたことがうかがえる。こうした地域の祭事が震災前と変わらず行われることは、被災住民の「復興感の獲得」に寄与するといわれており¹⁰⁾、東日本大震災においても、祭りは復旧・復興を推進する原動力の一つになっていた²⁾。海陽町では上記の3つを含み18の祭りがあり¹¹⁾、「地域社会の復興の主体となる被災者の心の拠りどころや地域コミュニティの維持のために、祭事を早期に再開、継続すること」を教訓の一つとして見いだすことができた。

4. おわりに

過去の地震津波のことについて約200年前に記された震潮記の内容にも、近い将来起こる南海トラフ巨大地震後の復興に活かせることがあり、それらについて一考察を行うことができた。四国防災八十八話の内容はマップやカルタなどにもされているが、今後こうした復興後の教訓も平易で楽しい防災教材にして、各地の防災学習で活用していく予定である。

表1 震潮記から抽出した復興に関する事項

頁	復興に関連する事項	テーマ	他同様の頁	考察
1 p.10	在所はすべて失くなり、助かった者は北町の方へ集まり、その時の城主、(中略)のお屋敷とすべての寺社はいうまでもなく、町家も残らずそれぞれ町並みにして復興されることになった。	現地再建・高台移転		①
2 p.11	古くから、当裏(北町)の東の海辺に大松原があり、この松を切り払うとともにそのほか北、南、西に山林が所々にあり、この分を残らず切り払い、家の建築材料にした。	現地の資材を用いた仮設住宅建設	p.22	②
3 p.25	総代や一般の家の諸道具も入り混じりになって埋まっているのを、皆追々見つけ出し、印ある分は持ち主が取り、印の無いのは皆々人の物を我が物とした。	被災後の治安悪化	p.26,57,59	
4 p.58	当時救助として、宍喰浦の御蔵から玄米三石をお出しになられ、(中略)、一人前一合宛の割で日数五日の間、施し粥(炊き出し)を言い付けられた。	被災直後の食料支援	p.62	
5 p.58	御救小屋(仮設住宅)を四か所建てるように(後略)。	被災後の住宅支援		
6 p.63	郷分の村々より役人が人夫を連れて来て(中略)町筋を取り片づけた。	自衛隊等の救助		
7 p.64	漁師共は一度に稼ぎの道を失って、難儀しているであろうから、(中略)、漁船(中略)、諸網もこれに順じて下されるよう(後略)。	被災後の就労支援		
8 p.69	不安な風説を唱え、何となく人の気分が騒々しく、(後略)。	流言による混乱	p.61,63,68	
9 p.70	宝永の地震の際は、祇園の祭り事三年ほど出来なかったが、この度は、祇園の神祭りも平年のようにできた。(中略)。参詣人も例年より多かった。	祭事と復興	p.71,73	③
10 p.90	(前略)、昨冬の大変について、往還道筋また宿々などは、このような状態で大いに痛み、四国遍路などはまず三ヵ年ばかりは通行が差し止めになり、今でも同様の通行止めである。	インフラ整備	p.72,75,89	
11 p.99	波の囲いとして十ヵ年の間に一戸より、一ヵ年に十本宛植え付けを命じたため、(後略)。	住民による植林、備え		
12 p.102	困窮の者達へ銀札百目宛、(中略)、五十目は救助銀のうちをもって充てられ、二十ヵ年賦になされた。	被災後の生活支援	p.71,72,100,101	

謝辞：本研究は一般社団法人四国クリエイト協会からの支援を受けて行われました。また、一般社団法人さいわいの井若和久氏に助言を賜りました。

参考文献：

- 1) 公益財団法人ひょうご震災記念 21 世紀研究機構：東日本大震災 復興の教訓・ノウハウ集，2021. 2) 徳島県防災・危機管理情報：徳島県復興指針，2019. <https://anshin.pref.tokushima.jp/docs/2019121000026/files/zentai.pdf> (最終閲覧日 2023.3.3) .3) 国土交通省四国地方整備局：四国防災八十八話，2008. 4) 田井晴代：阿波国宍喰浦 地震・津波の記録 震潮記，2006. 5) 深井 純一：田井久左衛門著・田井晴代訳『震潮記』に学ぶ，2008. 6) 井若和久ら：徳島県美波町における事前復興まちづくり，2021. 7) 東北地方太平洋沖地震を教訓とした地震・津波対策に関する専門調査会 第5回会合：高地移転と土地利用規制，2011. 8) 大水敏弘：実証・仮設住宅 東日本大震災の現場から，学芸出版社，2013. 9) 鳥取県：県産材活用木造応急仮設供給マニュアル，2015. 10) 山泰幸：「象徴的復興」とは何か(特集 災害復興制度の研究)，先端社会研究 (5)，pp.153-175，2006. 11) 海陽町観光協会，イベント・祭り - 海陽町観光協会 (kaiyo-kankou.jp)，(最終閲覧日 2023.3.2) .